



よつのうまれのおわりのよりどころ よろずのくにのきわめのむね
四生の終帰、万国の極宗

学校長 飯山 等

仏教が日本に入ってきたのは、聖徳太子の少し前の時代のことです。漢字という文字と共に、人々は大きな影響を受けました。漢字によって自分たちのコトバを表記し、記録する社会になり、新しい思想が入り、人々の考えが根本から大きく揺らぎ、改新された時代です。太子は、今世界で起こっているような悲惨が、飛鳥の地で続いている、争いの時代に生きられました。氏の対立、親子・血縁であっても刃を向け合い、生命を奪い合うという苛酷な時代を生きられ、その惨禍に悲痛されました。さまざまな人が集い合う。そのことによって争いが生じる。そうではなくて、人がもっともつとやわらかな心で生き合う。そのような集い合いが形成できないものだろうか胸を痛められました。

自身の属する集団の価値観を絶対視して、他者が大切に思うものを下に見て否定する。賤視し、拒絶する。そのような有り方を超えて、生まれの違い、國の違いを超えた、普遍的究極的な拠りどころを、新しい思想・仏教に見開かれることになったのです。私たちの差別心、狭隘な心を解き放つ力を仏教に求められました。その敬心を以て、寄り集い合う《われら》を形成する根帯にと願われたのです。そのような太子の悲しみと願いに貫かれているのが『十七条憲法』です。

第1条は「^{やわ}和らかなるをもつて^{たつと}貴しとし、^{さか}忤うること^{むね}無きを宗とせよ」と始まります。「忤」の字義は「^{さか}からう、^{みだ}れる」です。「和」は音声がほどよく響き合うように、人と人の関係や物事がおだやかに打ち解け合っていることを表現しています。それは、「^{みなたむら}人皆党有り。また^{さと}達る者少なし」と言われるように、異なりを力で抑圧したり、私たちが達人になり異なりを遙かに凌駕することを求めているのではありません。「^{やわ}上和らぎ^{むつ}下睦びて、^{あげつら}事を論うに^{かな}諧うときは、^{じり}事理自ずから^{かよ}に通う。何事成らざらん」と言われているように、われわれ一人ひとりが徹底してやわらかな心で、^{あげつら}論う(=理を尽くして論じ合う)ことによって生み出されてゆくのです。

太子は第2条を「^篤三寶を敬え。三寶とは^仏・^法・^僧なり」と始められます。そこにあるのは、「四生の終わりの帰、万の國の極めの宗なり」(よつのうまれのおわりのよりどころ、よろずのくにのきわめ

のむね)という喜びの顔きです。「よつのうまれ」というのは、胎生・卵生・湿生・化生という生き物の4つの生まれ方を言います。「四生の終帰、万国の極宗」には、太子の仏法の受けとめが端的に表現されています。生まれ方の違いを超えた、生きとし生けるものすべてのよりどころ、生まれの地の異なりを越えた究極的なまこと、と仏教を感受されたのです。

第2条は「^よ其れ三寶に^{まが}帰らまつらずは、^{ただ}何をもつてか^た枉れるを直さん」と結ばれます。木偏に王の字を書いて、音読みでは「オウ」、訓読みでは「まが・る」。「直す」は、直線の直ですから、私たちの曲がっている在り方をを真つぐにする。「枉」と「曲」はどう違うかということ、枉の字を辞書(新漢語林)で調べると、字義の2番目に、「しいたげる。いじめる。いためつける」という説明があります。

太子は、社会の形成因子としてその「枉」が厳然としてある。克服すべき必須の根本課題として、それを超絶した関係を実現しようとされたのです。私たちはしばしば他者を痛めつけたり、いじめたりすることによって、安定を得ようとする。強い者が弱い者を征服し、力で抑圧することによって、そこに集合体を築こうとする。でもそうじゃないのだ。私たちが安らかな心で、和らかな心で、自らを直す。そういうことによって築かれる集い合いの場こそ、私たちの本当の居場所になり、安心の場になる。

みなさんはこれから人生を築いていかれる若い世代です。そういう皆さんが、どのような《われら》を築くのか。私を大事にするということは、我等を踏みつけたり、彼等にして成り立つことではありません。我等が私を生み、生まれた私がその我等をより豊かにする、という作用の中で築かれていくのです。残念ながら、太子の時代から千四百年経っても、私たちの世界はなお分断され、戦さが絶えません。その悲しさがどうしようもない現実なのだということを、日々のニュースは伝えています。しかし、人間の歴史に、問題は無いという時代はなかった。それぞれの時代が問題を抱えて、だからと言って目を閉じたり、横を向いたりしないで、その問題の向こうに豊かな明るい未来を願われた先人がいたからこそ人類の歴史は続いてきたのです。《われ》を大事にする。彼等として放擲したり、踏みつけたりすることによってではなく、《われら》として邂逅し、響存する。《われ》の豊かさもそこから生育するのだと思います。